

恐怖が忍び寄る料理店

- 狩りに来た2人の紳士 → 山奥の西洋料理店へ
- 

入店
  - 扉 → レストランらしき注文
  - 奥へ進む → 不自然な注文内容
- 恐ろしい真実 → お客を料理して食べてしまう店

都会文明への痛烈な批判

- 
紳士の傲慢な態度
  - 自然や命への理解が欠如
  - 娯楽として動物を狩る
- 「料理される側」に
  - 傲慢さへの痛烈な警告
  - 東京に帰っても元に戻れず

印象に残る視覚的表現

- 読者の想像力を刺激 
- 物語の終盤
  - 鍵穴から青い眼玉がのぞいている場面
  - 紳士たちの顔が「くしゃくしゃになった」
  - ⇒ 恐怖で歪んだ表情が生々しく伝わる